

Title	ホスピスで得たこと
Author(s)	石橋, 真理子; 小松, 真樹子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 1996, 2(1), p. 41-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56792
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ホスピスで得たこと

石橋 真理子*・小松 真樹子*

LEARNING AT THE HOSPICE

Mariko Ishibashi, Makiko Komatsu

私達がアメリカにホスピス研修に行くことになったのは先輩からの紹介によるものだった。2人とも2回生で専門科目もほとんど習得しておらず、アメリカに行っても臨床的なことで学べることはほとんどないのではないかと、という不安もあったが、自分の将来について考える1つのきっかけになることを期待してアメリカ行きを決心した。

アメリカではLife Care Center、Nursing Homeなどの諸施設を見学し、日本のそれと比較してハード面、ソフト面共に違いがあることに気付いた。ハード面では医療施設・設備の規模の相違が挙げられ、これは日本のものと比べものにならない大きさであった。また内装も壁の色を暖色系のピンクにしたり、暖かい感じのする絵画を廊下の両側にかけるなど患者に対する細かい気配りがなされていて、日本でよくみかける様な医療施設独特

の冷たさ・疎外感は感じられなかった。

ソフト面では医療システムの違いが挙げられる。今日の日本の医療は、医師中心の医療である。しかし、アメリカでのホスピス医療は、医師の他、ナース・ソーシャルワーカー・カウンセラー・シスター・ボランティアなどのいろいろな専門職者によるチーム医療であった。またスタッフの勤務時間にもかなりの余裕がみられ、日本と比べて、家庭と仕事の両立や個人の時間をもつことをより可能にする配慮がなされていると感じた。

アメリカに行くまでは、日本での看護職の社会的地位の低さや、医療設備・制度に対して不満を抱いていたが、日本を外からみることによって日本の医療の良い面を改めて知ることができた。その中の1つが、全体的な医療制度である。スタッフへのインタビューで、彼らが抱いている今日のアメリカ医療における最大の不満要素は保



* 大阪大学医学部保健学科看護学専攻

険制度であることが分かった。アメリカでは日本のような皆保険制度がなく、経済上の問題により保険の加入に不平等が生じているのだという。はやく皆保険制度が実現して誰もが平等な医療をうけることのできる社会になってほしい、というのが彼らの切なる願いであった。

今回アメリカに行ったことで、精神的に受けた影響はとて大きかった。その中でも特に、スタッフとのインタビューで印象に残った言葉がある。「どうして男性であるのに、看護という職業を選んだのですか。」という問いに、「I love nursing. Nursing is my life work.」と胸を張って答えてくれたナース。日本では看護士の数

も少なく、同じ看護職の中でも特別視されがちだが、彼のこの言葉で「看護は平等な職業だ。」と改めて気付かされた。もう1つ印象に残った言葉が「Nurse is a servant of patients.」で、これは私達の看護に対する姿勢を内省させるものだった。こうしたスタッフとの出会いで、看護という職業を純粹に愛することの素晴らしさを知り、看護という職業に誇りをもつことができるようになった。これからも、今回のホスピス研修での経験をもとに、自らの目指す看護の道においてがんばっていこうと思っている。

